

コミュニケーション能力の育成に有効な連語の提案 —学習者コーパスを利用した連語指導の改善に向けて—

今田 健蔵

はじめに

近年、中学校・高等学校の英語教育ではコミュニケーション能力の育成というのが重視されている。しかし、コミュニケーション能力と密接な関わりを持つ連語は、文部科学省の発行する現行の学習指導要領でも具体的な内容が示されておらず、語彙指導においてないがしろにされてきた。本論文は、この問題の解決を図るため、コミュニケーション能力の育成に有効な連語を提案するものである。

本論文の構成は、次の通りである。1章では、まず連語の定義についての先行研究を紹介する。連語の定義は曖昧で、具体的な指定をすることができていない現状を説明する。また、連語指導の重要性と連語指導の改善についての考えを論じていく。連語はコミュニケーション能力と関わっているため、連語の指導が重要であることを述べる。そして、本論文での連語指導の基本的な考えを示す。具体的には、中学校・高等学校における時間的制約を考慮し、効率的な連語指導を目指すこと。また、連語指導では学習者の伝えたいことを表現することができる指導を目指すことが大切であることを述べる。2章では、1章で述べたことをふまえ、中学校で主に使用される3種類の教科書で扱われる連語を調査する。調査の結果、現在使用されている中学校の3種類の教科書は、扱う連語の種類に統一性がないことが明らかになる。また、一部の連語は提示方法に問題があり、学習者

が場面に応じて適切に使用することができないことを述べる。3章では、2章で行った調査をふまえ、教科書で扱われている連語が学習者が伝えたいことを表現できる連語であるか調査する。具体的には、日本の高校生の英作文から日本語で表現せざるをえなかった表現を調査する。そして、それらに対応する連語と教科書で扱われている連語が一致しないことを明らかにする。4章では、3章の結果と考察をふまえ、コミュニケーション能力の育成に有効な連語を提案する。また、連語を指導する際の留意点についても述べる。

1章 連語指導

1.1 連語の定義

連語というのは、コロケーションや熟語ともいわれ、複数の単語が結びつき、1つのまとまった意味をなすものである。しかし、連語は学習指導要領において、具体的な指定に至っていない。その原因の一つとして、連語というものの定義が明確にされていないということが考えられる。

連語はコロケーションともいわれると先に述べた。Firth(1951)はコロケーションとは慣習的に用いられる2語以上の語であるとしている¹。しかし、これでは具体的にどれがコロケーションなのか判断がつかないため、以下のような判断基準を決めている場合が多い。

第一の判断基準は、語の組み合わせの頻度である。Benson(1985)は、何度も繰り返し頻繁に用いられる語の組み合わせをコロケーションと定義している。しかし、頻度とはそもそも何を意味するのかはつきりしない。ある特定の母語話者が使用した回数だろうか。それとも、ある集団で使用された回数だろうか。前者の場合、頻度とはその人がしばしば口にする口癖のようなものもコロケーションとして考えることになる。また、その頻度

¹ ただし、Nation(2001)によると、collocation についての最初の研究は Palmer(1933)によるものであるとしている。

の基準、つまりどれくらい高い頻度ならそれをコロケーションとみなすのか境界線がはっきりしない。

第二の判断基準は、語の組み合わせの制限要因である。Carter & McCarthy (1988) は、strong と powerful という形容詞でそれを説明している。どちらの形容詞も同じような意味だが、strong tea と powerful tea では、tea には strong という形容詞を使うのが自然だと考えられる。これはおよそ慣習的な何かによる制限によって powerful tea という組み合わせが排除されているのだと考えられる。このように、一方を採用し、他方を排除する傾向を持つのがコロケーションであるとする立場がある。しかし、このような選択に関する制限がなぜ起こるのかについての判断はおおよそ主観的なものによると考えられ、判断が曖昧にならざるを得ない。

また、先ほど連語は熟語と言われることもあると述べた。これは、岡部・松本(2010)に次のように説明されている。

「連語」とは、一般的に熟語 (idiom) と呼ばれているものであるが、例えば、with a grain of salt のように構成する単語個々の意味から全体の意味を推定できないタイプだけに限っていない。句動詞の turn over などや、一般的にはコロケーションと呼ばれているものも、ここに含まれる(p. 170)。

引用が説明するように、連語は熟語やコロケーションを範疇に収めていると考えられている。しかし、熟語とコロケーションの区別は曖昧である。たとえば、Benson(1985)はそれぞれの語の意味から、全体の意味が推測できるものをコロケーションとし、できないものを熟語としている。したがって、kick the bucket は個々の単語から全体の意味を推測できないため、熟語として考える。しかし、Nation(2001)は by the way や take someone in などの組み合わせもコロケーションに含むと説明しており、O'Dell & McCarthy(2008)では、Idioms can be seen as one type of collocation.として、個人によって判断が揺れているのである。このように、連語が範疇に収め

ると考えられるコロケーションや熟語は明確な定義をすることができていないため、連語の具体的な指定ができていない現状があるのである。本研究ではこれ以降、熟語やコロケーションは連語の一部であると考えことにしておく。

このように、学習指導要領においても、過去の研究においても、連語の定義は曖昧である。しかし、これらの連語を指導することはなぜ重要なのだろうか。次に、連語指導の重要性をコミュニケーション能力との関係から説明していきたい。

1.2 連語指導の重要性

連語はコミュニケーション能力とどのような関係にあるのだろうか。コミュニケーション能力を Canale & Swain(1980)は4つに下位分類した。以下にその4つと、連語の関係を述べる。

第一に、コミュニケーション能力とは文法的能力(grammatical competence)であるという。これは、語彙の知識や形態論、統語論、意味論、そして音韻論についての知識である。連語を使用するには、これらについての知識が必要である。たとえば、前述したように、powerful teaのような組み合わせは不自然であるとわかる連語に関する知識が、コミュニケーションを行う上で必要である。

第二に、コミュニケーション能力とは談話的能力(discourse competence)であるという。これは、ある一つの話題について、まとまりのある文章を書いたり、話したりすることができることである。たとえば、ある話題について話したり書いたりする時に、一定の語彙の知識は必要であると考えられるし、語彙の一部である連語も必要に応じて使用されることが考えられる。

第三に、コミュニケーション能力とは社会言語的能力(sociolinguistic competence)であるという。これは、時と場、相手に応じた的確な理解と適切な言葉使いができることである。たとえば、フォーマルな場では、Shall we begin?と言うのが適切だろうが、より親しい仲の間では連語を使用して

Let's get started.などが使用されることもある²。連語を学ぶことによって、表現の幅が広がるため、適切な言葉遣いを選択することができるのである。

第四に、コミュニケーション能力は方略的能力(strategic competence)であるという。これは、たとえば伝達上の障害に遭遇した時、なんとかその障害を乗り越え、コミュニケーションを継続することができることである。たとえば、discuss という単語が即座に思いつかなかった場合、talk about で伝えたいことを表現することができる。つまり、あることを伝えたくてそれを直接示す単語を知らなくても、連語を使用して言い換えることが可能なのである。

また、Murao(2004)の研究では、TOEIC のスコアが 600 点から 850 点のグループと 860 点以上のグループでは、後者のグループの方がよりコロケーションの知識の持っていることが明らかになった。

以上、連語がコミュニケーション能力に密接に関わっていることを示した。したがって連語指導は重要であると考えられる。では、連語はどのように指導するべきなのだろうか。最初に、語彙指導の基本的な考え方を紹介する。そして、連語指導は効率的でなければならないことを述べる。次に、語彙指導を通して学習者のコミュニケーション能力の基礎を養っている実践例を見ていく。その実践例から、連語指導でも学習者の伝えたいことを表現することができる指導が大切であることを述べる。

1.3 語彙指導の基本的な考え方

太田・日臺(2006)は英語が使える中学生を育成するための語彙指導の考え方を次のように述べている。

現在の中学校現場での語彙指導はどうするのがいいでしょうか。授業では文法事項など新たに教えることが毎時間のようにあります。時

² 提示した例文は石橋(2006)によるもの。石橋はこれらの例文で社会言語的能力の言語使用域(register)の違いを説明している。

間が足りない状況です。その状況で新たな語彙を提示するなどの語彙指導だけに多くの時間を割くことはあまり能率的ではないと思います。

(中略) コミュニケーション活動 (この場合 can を使った pair work) に使用頻度が高い語彙 (この場合 can とよく使われる動詞) を使うことで、コミュニケーション活動がより活性化されます。そしてコミュニケーション活動を行うことで語彙を何度も使うことになります。その結果、語彙習得も促進されます。(p. 9)

つまり、コミュニケーション活動をする上で使用頻度が高い語彙を提示し、それを使うことでコミュニケーション活動を促進させ、語彙習得に結びつけるということである。連語指導でも、このように効率的な指導を目指す必要があると考えられる。しかしながら、たとえ使用頻度の高い連語を提示したとしても、学習者の伝えたいことを全て補うことができるわけではない。この点に留意して連語指導の改善にあたらなくてはならない。

1.4 語彙指導実践例

次に、高橋(2011)のコラムに掲載される加藤京子教諭による英作文での語彙指導の例を見ていきたい。加藤が2年前の1年生2学期中間考査で出題した問題は次のようなものであった。「自分の家族か友人を1名選び、四角の中に簡単な似顔絵を描き、英語で紹介しなさい。紹介文は5文から6文書くこと。」このような設定で、ある1年生が書いた答案が次のようなものであった。以下に原文のまま引用する。

This is my grandmother. Her name is Keiko. She is 65. She is lives in Hiyogo. She likes frawa. She likes gadeing. It's diyutehow!

この解答はスペリングなどの細かい誤りがある。それにもかかわらず、この解答に対する加藤の採点は、満点であったと高橋(2011)は述べている。なぜなら、採点基準は英文をまとまりで書けているかどうかだからである

と説明している。そして高橋(2011)はこの指導について次のように評価している。

単語のつづりの誤りなど、指摘せずとも自分自身で間違っているだろうと分かっているので、減点しないからこそ、否定的・批判的にしないからこそ、自分で調べるか教師に質問に来るだろうという「生徒への信頼」があればこそできること。誤りや失敗を指摘して否定することは素人にもできる。自分でも気づく誤りをあげつらうことよりも、「本人も気づかないであろう大切に育みたい優れた点」を見つけ、褒めてあげれば、自ら伸びてくれるはず、より大きく育ててくれるはずだ、という生徒への信頼があればこそできることだと思います。(p. 218)

次に、同じ生徒が11月の文化祭の展示作品として書いた家族の紹介文をみていきたい。この作品を見れば、生徒の英語を書く力が育っていることがわかる。

This is my grandmother. Her name is Keiko. She likes flowers. She likes gardening. It's very very beautiful! She is a very good cook. But sewing is her weak point. She likes to sing a song. She practices children's songs. She is singing in a loud voice. Her favorite doll is the owl. She has many owl figures.

非常にまとまりよく表現できた素晴らしい作品であると考えられる。この学習者の成長は著しい。この生徒をここまで成長させた要因は何か。高橋(2011)は次のようにこの実践例をまとめている。

一人ひとりの生徒への、愛にあふれる教師のあたたかで寛容な姿勢が、それも単純な甘やかしではなく、教師としての先々の指導の見通

しと生徒を伸ばし育てる確信あつての寛容さが、一人の子どもをここまで伸ばすのですね。「教育とは人を育てることにあり。」学校で、授業で行う評価は、短絡的な選別や順位づけのためではなく、長い目で生徒を育て、伸ばすために使いたいものですね。(pp. 219～220)

この実践例は連語指導のあるべき姿を提示していると考えられる。それは、一般的に語彙指導にも言えることだが、連語指導でも学習者が伝えたいことを文法やスペリングなどよりも重視すべきだということである。つまり、学習者のコミュニケーション能力の育成を図るためには、学習者が伝えたいことを表現できるようにする連語指導が必要である。

1.5 望ましい連語指導

先に、太田・日臺(2006)が述べた語彙指導の基本的な考え方を紹介した。連語指導では効率的な指導を目指す必要がある。また、仮に多くの連語を提示することができても、学習者の伝えたいことを全て補うことができるわけではないことに留意したい。次に、高橋(2011)のコラムで紹介される加藤の指導について述べた。連語指導では、文法やスペリングなどよりも学習者の伝えたいことを重視すべきである。したがって、この2点から考えられる、望ましい連語指導は次のような指導である。それは、学習者が伝えたいことを表現できなかつた時、指導者がそれらのことを表現できる連語を提示しコミュニケーション活動を促進させる指導である。

では、連語に関して「基本的なもの」を扱っているとされる文部科学省検定済み教科書は、実際にはどのような連語を扱っているのだろうか。そしてそれらの連語は、学習者が伝えたいことを表現できる連語なのだろうか。次章の予備研究で、教科書で扱われる連語はどのようなものかを調査した。具体的には、中学校で主に使用される3社³の検定教科書で扱われる連語を調査した。また、それらの連語が学習者の伝えたいことを表現でき

³ 使用した教科書については後述する。詳細は参考文献を参照。

る連語であるか考察した。

2章 予備研究—教科書が扱う連語の調査

2.1 目的と対象

予備研究の目的は、教科書で扱われる連語はどのようなものかを調査することである。また、それらの連語が学習者が伝えたいことを表現できる連語であるか考察することである。しかし、連語というのは先行研究からも明らかなように定義の仕方には多様な立場がある。したがってこの予備研究では各社の教科書の巻末、いわゆる語彙リストに2語以上で提示されているものを集めることにした。これらは、各教科書の編集者が連語として考えているものであると考えられる。

なお、予備研究で連語を調査するにあたって、動詞の連語のみを扱うことにした。たとえば、get up や look at などである。これには2つの理由がある。第一に、動詞が英語の文を作る核と重要な役割をもつからである。すなわち英語において、動詞は英文の構造を規定し、必要とする項を決定するからである。第二に、多くの種類がある連語を扱うことを考えるとその種類を限定せざるを得ないからである。本論文ではこれ以降、連語とは動詞の連語を指すことにする。

また、この予備研究のデータ元は神奈川県で主に使用される3社の中学校の教科書、New Crown (以下 NC)、New Horizon (以下 NH)、Sunshine (以下 SS) の3学年分にした。

2.2 手順—教科書の語彙リストの編集

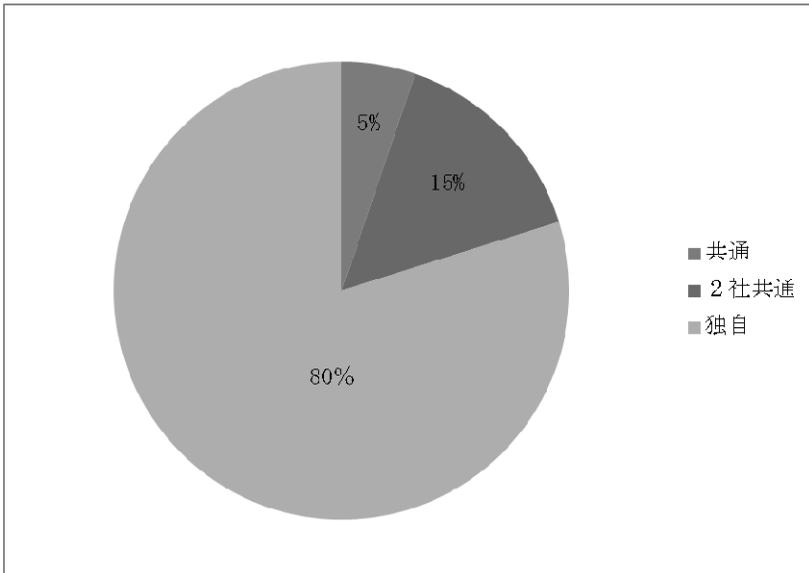
各教科書の巻末にある語彙リストから、連語を手作業でエクセルに入力した。この時エクセルファイルは各教科書別にわけて作成した。教科書別にわけて作成したデータ内のうち、それぞれの連語がそのほかの教科書にでているかどうか作成したファイルを見て一つずつ確認を行った。そして、それぞれの連語が各教科書会社で扱われているかどうかチェックできるよ

う一覧にまとめた。

2.3 結果—3種類の教科書を調査して得た134種類の連語

調査の結果、3社合計134種類の連語を提示していることがわかった。そのうち3社共通に提示されているものが7種類(come from, get to, get up, listen to, look at, look for, stand up)、2社共通(3社のうちいずれか2社)の連語が20種類(agree with, believe in, call~back, change trains, fall down, fill up, find out, get off, give off, go back to, look forward to, look into, run away, sit down, speak to, take care of, talk about, tell~to, think of, try to)であった。また、1社でしか提示していない連語が、NCでは22種類、NHでは38種類、SSでは47種類であった。3社合計で107種類であった。全体数は134種類なので、3社共通の連語が全体の約5%、2社共通の連語が全体の約15%、3社独自の連語が約80%となる。以下の結果をまとめたのが図1である。

図1：各教科書が扱う連語の割合



以下に示すのは各教科書の語彙リストにでている連語の一覧である。(○は該当を示す)

表 1 : 各教科書で扱われている連語の一覧

No.	V Collocation	NC	SS	NH	No.	V Collocation	NC	SS	NH
1	agree with		○	○	33	get home		○	
2	answer the telephone			○	34	get off	○	○	
3	ask (～) for			○	35	get on～		○	
4	ask～to		○		36	get to	○	○	○
5	believe in	○	○		37	get together			○
6	blow off			○	38	get up	○	○	○
7	bring～back		○		39	get well	○		
8	call to			○	40	give it a try		○	
9	call～back		○	○	41	give off	○	○	
10	care for		○		42	give up	○		
11	change trains		○	○	43	go away			○
12	come and			○	44	go back to	○	○	
13	come back			○	45	go by			○
14	come from	○	○	○	46	go camping		○	
15	come on			○	47	go down			○
16	come out	○			48	go home		○	
17	come to school			○	49	go off		○	
18	come true		○		50	go out			○
19	cut～in two		○		51	go to			○
20	decide to			○	52	go to bed		○	
21	die of		○		53	go up to	○		
22	die out	○			54	go～ing			○
23	do my best		○		55	grow up	○		
24	fall down		○	○	56	hang up			○
25	fall on			○	57	happen to		○	
26	fall out		○		58	have a cold		○	
27	feel free to		○		59	have a good time		○	
28	feel like		○		60	have～on		○	
29	fill up	○	○		61	have～with		○	
30	find out	○	○		62	hear about			○
31	gather together		○		63	hear from			○
32	get along		○		64	hear of			○

No.	V Collocation	NC	SS	NH	No.	V Collocation	NC	SS	NH
65	help with			○	100	speak to	○		○
66	help~with		○		101	stand up	○	○	○
67	hold on		○		102	start off		○	
68	judge~by	○			103	stay in bed		○	
69	keep~ing	○			104	stay with		○	
70	keep~off		○		105	stop~ing		○	
71	knock over	○			106	suffer from	○		
72	know about	○			107	take a bath		○	
73	lay an egg	○			108	take a breath		○	
74	let me see	○			109	take a look at		○	
75	let me tell you about	○			110	take a picture	○		
76	listen to	○	○	○	111	take a seat	○		
77	live a~life			○	112	take away			○
78	look around			○	113	take care of	○	○	
79	look at	○	○	○	114	take the train	○		
80	look for	○	○	○	115	take time			○
81	look forward to	○	○		116	talk about	○	○	
82	look into	○	○	○	117	talk with	○		
83	look like		○		118	tell~to		○	○
84	look up			○	119	tell one student from another		○	
85	make a mistake		○		120	think about			○
86	make friends			○	121	think of		○	○
87	mix~with		○		122	try to	○		○
88	move to		○		123	turn off	○		
89	pass around			○	124	type in		○	
90	pass~on to		○		125	wait for		○	
91	put text into braille			○	126	wake up	○		
92	read out		○		127	walk to		○	
93	run after			○	128	walk up to		○	
94	run around			○	129	want~to			○
95	run away	○		○	130	wash~away			○
96	share~with		○		131	wish for			○
97	sit down	○	○		132	work with a volunteer group			○
98	Sit up straight	○			133	worry about		○	
99	sound like			○	134	write to	○		

2.4 考察—教科書が扱う連語の種類と提示方法について

図1の結果からわかることは、学習者が学ぶと考えられる連語は教科書によって大きく異なるということである。全体の8割を占める連語が各教科書で独自に扱われている連語である。したがって、NCで学んだ学習者とNHで学んだ学習者とでは知っている連語の種類がまったく違う可能性がある。

もちろん、学習者が学ぶ連語は教科書の語彙リストに掲載されているものだけではない。独自の英語教材、たとえば単語帳・熟語帳、それから指導者による語彙指導によっても学ぶことがある。しかし、教科書によって独自に扱う連語が全体の約80%を占める結果を考慮すると、指導者側と学習者側で未習・既習の認識にズレが生じていることが予測できる。問題なのは、たとえば高校入試で、NCでしか出ていない連語を出題すると、NHやSSで学んだ学習者は不利になるという可能性がある⁴ということである。また高校の授業において、学習者が中学生の時に一定の連語を学んだと考える指導者がいれば、混乱が生ずるということはおおよそ検討がつく。このような現状では、なにが学習指導要領でいう「基本的」な連語なのか見当がつかないといえよう。

ただし、BNC⁵の話し言葉コーパス内で最も使われているコロケーションを100種類提示したShin & Nation(2008)の結果では、動詞の連語は15種類あった。(talk about, look at, come on, come in, come back, have a look, come out, say to, look for, make sure, get in, find out, talk to, go out, hang on) これらのほとんどが教科書で扱われている連語である。この点においては、一見すると教科書は基本的な連語を扱っていると考えることもできる。しかし、この研究で使われているコーパスの英語は全て英語を母語とする話者のものであり、学習者に教えるべき連語と必ずしも一致はしないだろう。

次に、詳細に連語を見ていきたい。3社の教科書に共通する連語 (come

⁴ 高校入試などでは一般的に注などがあって、意味が分かる場合もある。しかしそれでも初めて見る場合には混乱があるだろう。

⁵ British National Corpus の略。総単語数が約1億語の最大級の英語コーパス。

from, get to, get up, listen to, look at, look for, stand up) は基本的な連語であるといえる。なぜなら、学習指導要領が示す〈言語の使用場面〉の例に示される使用されることが予想できる連語だからである。たとえば「自己紹介」、「家庭での生活」や「学校での学習や活動」で使用されることが予想できる。また、〈言語の働き〉の例でいえば、「情報を伝える時」や、「考えや意図を伝える時」、「相手の行動を促す時」に使用されることが予想できる。そこで、これらの連語が教科書本文においてどのように使用されているか見ていくことにする。(下線は著者によるもの)

〈言語の使用場面〉

「自己紹介」の場面で使用されると考えられる例

- (1) A: Where do you come from? (SS1, p. 50)
B: I come from Singapore. (SS1, p. 50)

「家庭での生活」の場面で使用されると考えられる例

- (2) I get up at seven. (NH1, p. 78)
(3) A: What time did you get up this morning? (NC2, p. 6)
B: I got up at seven. (NC2, p. 6)

「学校での学習や活動」の場面で使用されると考えられる例

- (4) I get to school at eight ten. (NH1, p. 78)
(5) Listen to me. (SS1, p. 11)
(6) Look at the board. (SS1, p. 11)
(7) Stand up. (SS1, p. 11)

〈言語の働き〉

「情報を伝える」働きを持つ例

- (8) A: It comes from the Japanese language. (NH2, p. 25)
- (9) A: Do many people in India speak English?
B: Yes. It comes from the British. (NC2, p. 54)
- (10) When Hiroshi got to the park, Aya was eating lunch under a tree. (SS2, p. 21)
- (11) I listen to it every night. (NH2, p. 2)
- (CD 見せながら、その CD について紹介している。)

「考えや意図を伝える」働きを持つ例

- (12) A: I'm looking for my bag. I put it around here a few minutes ago. (SS2, p. 61)
B: Shall I look for it with you? (SS2, p. 61)
- (13) A: May I help you?
B: Yes, please. I'm looking for a sweater. (NH2, p. 85)
- (14) Some young people don't stand up when they see an old person. (NH3, p. 56)
- (優先席は若い人が座ってもいいかどうかというトピックで)

「相手の行動を促す」働きを持つ例

- (15) Look at this flower. (NC1, p. 38)
- (16) Look at this! (NH1, p. 14)
- (17) A: You can hear the sounds of nature in the music.
A: Listen to me. (NC2, p. 33)
- (18) A: Look. The curtain is opening.
B: OK. Let's start. Everyone, please stand up. (NC1, p. 73)

以上、3 社共通の連語を列挙した。各教科書において、これらの連語は言

語使用の場面や働きに応じて適切に使用されている。学習者にこのようなインプットを与えられれば、同じようにこれらの連語を場面や働きに応じて適切に使うことができるようになると期待できる。

しかし次の連語は提示方法に問題がある。使用される場面が限定的であるからである。次の例は教科書からである。(下線は著者によるもの)

(点字グループのメンバーである絵美が自分の活動について発表している)

(19) We're using computers to put text into braille. (NH3, p. 7)

(20) tell one student from another (SS2, p. 60)

(ボランティアで点字を入力する絵美さんが発表している)

(21) I work with a volunteer group. (NH3, p. 7)

これらの連語は、教科書で使用されているインプットだけでは、およそ使用できるようにならないと考えられる。なぜなら、使用される場面や機能が限定的であるからである。

まず、(19)の例文で使用されている連語について考えていきたい。点字を入力するという表現を使う場面はかなり限られていると考えられる。したがって、学習者が連語の知識について確認を行う語彙リストでは、put ~into…とするべきである。このようにすれば、使用される場面や機能において幅が広がり、学習者が表現したいという気持ちに答える手助けになると考える。

次に、(20)の連語について考えていきたい。この連語は本文中に、完全な文の一部として提示されていない。リスニング活動である人の架空インタビューで使用される表現をまとめた脚注内に提示されている。教科書側は、リスニング活動において学習者がこの連語を学ぶことを期待している⁶

⁶ ただし、リスニングの解答にこの連語の聞き取りがかならずしも必須というわけではない。脚注に載っているということから、教科書側の意図を著者が判断した。

のである。しかし、この連語も使う場面が限られていると考える。教科書が提示している訳は「生徒一人ひとりを区別する」だが、このような意味で使う場面は限られている。だから、使うことができる場を広げることができるよう、tell~from…とすべきであると考え。

最後に、(21)の例文で使用される連語について考えていきたい。語彙リストに示されるこの連語の訳は「ボランティアグループを手伝う」である。この連語が使用される場面は限定的であるといわざるを得ない。この連語はwork with~とすべきである。なぜなら、この連語の目的語、すなわち手伝う対象は多様であり、このようにすることによって使用する場面が広がるからである。

2.5 予備研究のまとめ

教科書の連語を調査した予備研究によって得られた結果をまとめると次のようになる。第一に、学習者が学ぶと考えられる連語は統一性がない。第二に、一部の連語は提示方法に問題があるため、学習者がそれらの連語を使用することはある一定の機会を除いて期待できない。以上二点を考慮すると、現状の教科書における連語の扱いは、学習者の表現したい気持ちに答えることができているとは言えないだろう。これでは、学習者のコミュニケーション能力の育成は期待できないと考えられる。

この問題の解決を図るためには、まず学習者が伝えたかったのにうまく表現出来なかったことを把握する必要がある。そして、その表現出来なかったことが表現できる英語の表現を指導することが指導の改善につながると考える。したがって、本研究は、学習者の英作文から学習者が表現出来なかったことを調査し、それを表現できる連語を提案する。

3章 本研究—コミュニケーション能力の育成に有効な連語の提案

3.1 目的—伝えたいことが表現できる連語の調査と提案

本研究の目的は、英作文において学習者が表現したかったができなかった表現を調査し、それを表現することができる連語を考察し、提案するこ

とである。そこで、本研究は次の2つのことを行う。

- (i) 英作文において、学習者が日本語で伝えざるを得なかった表現を調査する。
- (ii) それらの表現が教科書で扱われる連語で表現できるかどうか考察する。

2つのことを行うことによって以下のことを明らかにし、提案する。第一に、学習者が伝えたいことを表現できる連語は教科書で扱われているのか。扱われているのであれば、どの教科書で扱われているのかということである。第二に、学習者の伝えたいことを表現できる連語が教科書に扱われていない場合、その連語が教えられるべきであると新たに提案することである。これによって、連語指導によるコミュニケーション能力の育成を図ることが期待されると考えられるからである。

3.2 データ—学習者コーパス JEFLL について

本研究では、学習者が書いた英作文のデータが必要になる。英作文のデータを取得する一つの方法として、学習者コーパスというものを利用することが考えられる。

学習者コーパスとは、ある学習者集団が書いた英語のテキストの集合で、これらを指導や研究に活用できるようデータベース化し検索ができるようになったものである。本研究では Japanese EFL Learner Corpus (以下 JEFLL) という学習者コーパスが適切であると考えられる。このコーパスの母集団は日本の中学校・高等学校の英語学習者である。公開されているデータの語数とファイル数・学校の種別や学校のレベルについては投野 (2007) より以下に引用する(括弧内の数字はファイル数を示す)。

表 2: JEFLL の英作文データにおける中学校・高等学校別の語数とファイル数

	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3
語数	51,160	159,741	117,764	60,713	170,557	78,981
ファイル数	1,393	2,635	1,589	742	1,977	1,189

表 3: JEFLL の英作文データにおける学校の種別と学校のレベル⁷

	高	中	低	合計
国立	287,285(4,512)	49,310(711)	0(0)	336,595(5,223)
公立	0(0)	52,090(865)	1,827(104)	53,917(969)
私立	270,854(8,229)	7,938(130)	0(0)	278,792(3,846)
合計	558,204(8,229)	109,273(1,705)	1,827(104)	669,304(10,038)

英作文のテーマは論説文と叙述文の2タイプに大きく分けられ、それぞれのタイプに各3種類の作文トピックが設けられている。以下の英作文は授業時間内で実施し、制限時間は20分、辞書の使用は不可とし、どうしても英語にできない部分は日本語で書いても構わないという設定で収集された。ただし、データ収集の環境によって指示やモデル文に若干の差異があるとしている。また、データ収集の実際は、研究協力者である現場の中高教員の采配に一任されている。特に、一部の協力校では1つの集団に複数のトピックを書かせている場合があるとしている。トピックとその語数およびファイル数を下に示す。

表 4: JEFLL における英作文トピックの種類とその語数

トピック	語数(ファイル数)
論説文: (1) 「朝ごはんにはパンがいいかご飯がいいか?」	137,289(2,033)
(2) 「大地震が来たら何を持って逃げますか?」	77,729(1,026)
(3) 「お年玉〇円もらったら、何を買いますか?」	127,070(2,055)
叙述文: (1) 「あなたの学校の文化祭について教えてください。」	161,645(2,280)
(2) 「浦島太郎のその後について想像して書きなさい。」	78,306(1,286)
(3) 「今まで見た怖い夢について教えてください。」	87,265(1,358)

投野 (2007) によるとこの JEFLL の特徴は次のようにまとめられている。

- (i) 初級・中級英語学習者の英語習得データとして世界最大級であること。

⁷ 学校のレベルをどのように分けたかは、JEFLL の解説書である投野 (2007) でも明らかになっていない。

(ii) 学年や、学校レベルに偏りがあること。(iii) 作文トピックが限定されている分、トピックの影響が強くなること。

(i) について、ほかの学習者コーパスは大学生以上のデータを主に集めているのがほとんどである。したがって、中高生レベルのデータを集めているこの JEFLL は世界的にも珍しく、中高生の現状を把握するには適しているといえる。(ii) については、一般的にいて、英語教育がうまくいったと仮定した場合の中上級レベルの学校のデータは安定しているため、使用例の分析には適していると考える。一方、(iii)については、この学習者コーパスは作文トピックが限定されている。したがって、この学習者コーパスを利用して分析した結果を議論するときには考慮する要素であると考えられる。

以上のような特徴をもつ JEFLL だが、このコーパスを本研究に採用した最大の理由は、日本語の使用を許可している点にある。この JEFLL では、「どうしても英語に出来ない部分は日本語で書いてもかまわない」としてデータを収集しているのである。したがって、学習者が英語で表現したかったけど、表現できなかったことが日本語で書かれている。本研究はこれらの日本語を調査し対応する連語を提案するものである。次に、これらの日本語を調査した手順を説明する。

3.3 手順—JEFLL を使用してデータを得た手順

本研究では英作文のデータとして JEFLL を利用する。研究利用は無料だが、JEFLL のホームページから下記の引用を示す必要があるので以下に示す⁸。

本研究に使用したデータは、投野由紀夫を中心として構築された中高生の英作文コーパス Japanese EFL Learner (JEFLL) Corpus に基づくものである。検索ツールは、JEFLL Corpus の web 検索システム (小学館コーパ

⁸ JEFLL のホームページアドレスは <http://scn.jkn21.com/~jefll03/> である。

スネットワーク) を利用した。

検索ツールを利用し以下のような条件で日本語の表現を収集した。(i) データは高等学校1学年から高等学校3学年のデータに限定した。(ii) (i)で限定されたデータのうち、動詞にあたる表現が3回以上使用されているものを対象にした。なお、(ii)を行ったあと再度その表現が使用される文を検索し、例文の収集および回数の確認をした⁹。データを高校生に限定したのは、中学校で学んだと考えられる連語が適切に使えているかどうかを調査したいからである。

データを高等学校1学年から高等学校3年生に限定すると、日本語の使用が8943回、4446種類あることがわかった。このうち、3回以上使用されている日本語の表現は524種類であった。この524種類を著者が1種類ずつ見ていった。結果、動詞と考えられる日本語の表現は30種類であった。この30種類が使用される文を検索した結果、173例あった。これを本研究の分析の対象とした。

3.4 結果—学習者が表現した日本語とそれらに対応する連語

次に示す表4は本研究において調査した学習者が使用した日本語の表現を一覧にしたものである。

⁹ このようなことをするには理由がある。JEFLLでは、検索ツールを利用しても特定の日本語の表現を指定して検索ができないようになっている。したがって、3回以上出てくる動詞が使用されている例文の検索は日本語表現のデータを全てダウンロードして、テキストエディターを使って検索した。

表 4: 学習者が使用した日本語の表現一覧

	日本語		日本語
1	遭う	16	上映する
2	飽きる	17	調べる
3	預ける	18	貯める
4	集まる	19	担当する
5	いじめる	20	貯金する
6	演じる	21	つまっている
7	追いかける	22	出てくる
8	開催する	23	展示する
9	完成させる	24	逃げる
10	決める	25	残っている
11	後悔する	26	持ち出す
12	参加する	27	催す
13	集中する	28	用意する
14	出演する	29	預金する
15	準備する	30	連絡をとる

次にこれらの日本語の表現が使用される例文¹⁰を列挙¹¹し、それぞれに対応する連語を考えていく。

遭う

(1) a. But if I あう災害に本当に, I can't choose what I take because I want to take all of in my house 本当は.

b. I think, someday they will いたいめにあう.

(1)' meet with a misfortune [accident] (『英和活用大辞典』, 以下『英和活用』)

「遭う」は、なにか悪いことに遭遇する、状況になるといった意味で使わ

¹⁰ 全ての例文は本論文の付録に掲載してある。

¹¹ 以下に示す例は、文法やスペリングなどの学習者依存のものなどは直さず原文のまま載せている。しかし、コーパス依存の記述などは編集して削除している。

れている。これは、(1)'が示すように、meet with〜で表現することができると考えられる。meet with a misfortune [accident]で災難[事故]に出会う、とされているからである。

飽きる

- (2) a. I eat always 洋食, I 飽きる, I want to eat Japanese foods.
 b. So if my breakfast is rice, I will 飽きる the rice.
- (2)' a. Eat cakes too often and you'll get tired of them. (ケーキもたびたびだと飽きる)
 b. Strange, isn't it, how we can eat rice every day and not get tired of it.
 (ご飯は毎日食べても飽きないから不思議だね) (いずれも『和英大辞典』, 以下『和英』)
- 「飽きる」は、ある食べ物に飽きるという意味で使われている。これは、(2)'で示すように、get tired of〜で表現することができると考えられる。

預ける

- (3) a. I've always gone to the bank and, 預ける ten thousand yen from it.
 b. Then, I 預ける all the rest my お年玉 to postoffice.
- (3)' He put that money into the [a] bank. (彼はその金を銀行に預けた) (『和英』)
- 「預ける」は、お金を銀行等に預けるといった意味で使われている。これは、(3)'で示すように、put A into B¹²で表現することができると考えられる。

集まる

- (4) a. The first day when we 集まる, some of us came and others of us didn't come.
 b. We 集まった in summer vacation many times and prepared.

¹² Aは預ける物などを、Bは預ける場所などを表す

(4)' The teachers and parents got together on Saturday afternoon. (土曜の午後 PTA の集まりがあった) (『英和活用』)

「集まる」は、複数の人が特定の日に集合するという意味で使われている。これは、(4)'で示すように、get together で表現することができると考えられる。

いじめる

(5) a. Children いじめる tartol again.

b. A taitle was surrounded by children and he was いじめられる.

(5)' The older kids were picking on Richie at recess. (年上の子供たちは休憩時間にリチーをいじめていた) (『ジーニアス英和大辞典』, 以下『ジーニアス』)

「いじめる」は、対象の人をいじめるという意味で使われている。これは、(5)'で示すように、pick on～で表現することができる¹³と考えられる。

演じる

(6) a. I didn't want to 役を演じる.

b. Our class 演じた Snow-White, and I 演じた 小人.

(6)' a. He played the part of Hamlet. (ハムレットの役を演じた) (『英和活用』)

b. Mr Morris was determined to put on a show of family unity. (Collins

COBUILD Advanced Learner's Dictionary より, 以下『コウビルド』)

「演じる」は、劇で役を演じたり、劇そのものを行うという意味で使われている。これは、(6)'で示すように、前者は play the part of～、後者は put on～で表現することができる¹³と考えられる。

¹³ ただし、厳密には pick on～は物理的な危害を加えるという意味で使うことはない。この点に関しては次章で議論していく。

追いかける

(7) a. Then I was 追いかける by many people.

b. One of them which I really remember is 追いかけられる by very big dog.

(7)' He took and ran after the boy. (さっと少年のあとを追いかけていった)
(『英和大辞典』, 以下『英和』)

「追いかける」は、誰もしくは何かが追いかけるという意味で使われている。これは、(7)'で示すように、run after で表現することができると考えられる。

開催する

(8) a. Our school festival was 開催する on September 15.

b. It is 開催される on September 14 and 15 on this year.

(8)' The meeting will take place next Monday. (会は来週の月曜日に催される)
(『英和』)

「開催する」は、文化祭などの行事が行われるという意味で使われている。これは、(8)'で示すように、take place で表現することができると考えられる。

完成する

(9) a. When we 完成させる paper 紙芝居, I was so happy.

b. but When I 完成させる music, I become very happy.

(9)' I wasn't able to finish making the apron within the allotted time. (私はエプロンを、与えられた時間内に仕上げるができなかった)(『和英』)

「完成させる」は、進行中の作業などを終了するという意味で使われている。これは、(9)'で示すように、finish～ing で表現することができると考えられる。

決める

(10) a. We 決めた 300 set doughnut.

b. First we 決めた the meeting and 決めた 役割を.

(10)' a. They decided to stand and fight it out. (『英和』)

b. Don't decide on this important matter too quickly. (『英和活用』)

「決める」は、ある行動をすることを決定する、または一つの事柄についてある判断をしたという意味で使われている。これは、(10)'で示すように、decide to V¹⁴や decide on~で表現することができると考えられる。

後悔する

(11) a. If I lose them, I would 後悔する.

b. The items that I 後悔する after the escape are pictures or videos I, my friends and my family was taken.

(11)' If you can forget that you ever had it, you won't regret losing it. (『和英』)

「後悔する」は、物などを失くして後悔するという意味で使われている。これは、(11)'で示すように、regret~ing で表現することができると考えられる。

参加する

(12) a. But, I have tennis 試合その日, so I couldn't 参加する the bazzar.

b. In this year, I 参加する two events.

(12)' a. Everybody in the family used to take part in spring cleaning. (『英和活用』)

b. Only I participated in that convention. (『ジーニアス』)

「参加する」は、行事やイベントなどに参加するという意味で使われている。これは、(12)'で示すように、take part in~や participate in~で表現することができると考えられる。

¹⁴ V はこの場合、原形動詞を表す

集中する

(13) a. Because if I don't have breakfast, I can't 集中する and 何をしてもあまりうまくいかない。

b. If I don't breakfast I feel hungry and I can't 集中する classes.

(13)' concentrate on a single task (1つの仕事に専念する) (『英和活用』)

「集中する」は、授業などが何らかの原因によって集中できないという意味で使われている。これは、(13)'で示すように、concentrate on～で表現することができると考えられる。

出演する

(14) a. That is why I 出演した that.

b. I 出演した a little.

(14)' take part in a drama (劇に出る) (『英和活用』)

「出演する」は、特別なイベントなどに出演したという意味で使われている。これは、(14)'で示すように、take part in で表現することができる。

準備する / 用意する

(15) a. I don't 準備する for an earthquake now.

b. We had been 用意する for our school festival from 一学期.

(15)' Mary is sitting up late this week to prepare for her finals. (今週メリーは期末試験の準備のために夜遅くまで起きている) (『ジーニアス』)

「準備する」と「用意する」は、ある出来事に対する準備をするという意味で使われている。これは、(15)'で示すように、prepare for～で表現することができると考えられる。

上映する

(16) a. Our class 上映した a movie.

b. We 上映する the movie 8 times.

(16)' put on the screen (『和英』)

「上映する」は、映画などを上映するという意味で使われている。これは、(16)'で示すように put on～で表現することができると考えられる。

調べる

- (17) a. I 調べた Hanae Mori that famous デザイナー
b. One group which is each class students 調べた about interest things.
(17)' a. look up a person (『英和』)
b. I looked into food poisoning from a number of angles. (『和英』)

「調べる」は、人や物のことについて調べるという意味で使われている。これは、(17)'で示すように、look up～や look into～で表現することができると考えられる。

貯める

- (18) a. But I will ためる money until this winter.
b. But, I think that I will not spend my money because I want to ためる for the future.
(18)' I saved up for it by doing odd jobs. (臨時の仕事をしてそのためのお金をためた) (『英和活用』)

「貯める」は、お金を使わないでとっておくという意味で使われている。これは、(18)'で示すように、save up～で表現することができると考えられる¹⁵。

担当する

- (19) a. I 担当した our classroom decoration.
b. Boys 担当した to build the 門 and girls 担当した to make the かざり.
(19)' How about me taking charge of the first half, and you the second? (前半

¹⁵ 「貯める」は save のみでも表現することができるが、この点については次章で議論していく。

は僕が、後半は君が担当するってのはどう) (『和英』)

「担当する」は、仕事や作業を担当したという意味で使われている。これは、(19)'で示すように、take charge ofで表現することができる。

貯金する

(20) a. Because I 貯金していた when I was young little, I continue my coustom from I was young.

b. I 貯金する almost money in the post office this year.

(20)' save up money for an overseas trip. (『英和活用』)

「貯金する」は、お金を貯めるという意味で使われている。これは、(20)'で示すように、save up〜で表現できると考えられる。

つまっている

(21) a. Because they つまっている a lot of memories from being born to now.

b. Because many memories つまっている in it.

(21)' Your words bring back many memories. (君の言葉を聞くといろいろと思いでがよみがえってくる) (『英和活用』)

「つまっている」は、ある物、たとえばアルバム等が、思い出を呼び起こすという意味で使われている。これは、(21)'で示すように、bring back〜で表現できると考えられる。

出てくる

(22) a. In my dream Sadako was 出てくる every day and Sadako took over me, I was so frightened.

b. Then けむり was 出てくる.

(22)' The sun came out from behind a cloud. (太陽が雲の後ろから顔を出した。) (『ジーニアス』)

「出てくる」は、人や物が出現するという意味で使われている。これは、(22)'で示すように come out で表現できると考えられる。

展示する

(23) a. Our class 展示した photo graphes.

b. This year, 書道 クラス 展示した our 作品.

(23)' The British Museum has collected and put on display historically valuable items of heritage from all over the world. (大英博物館は世界中の歴史的に貴重な遺産を集め展示している) (『和英』)

「展示する」は、物や作品などを展示するという意味で使われている。これは、(23)'で示すように、put on～で表現することができると考えられる。

逃げる

(24) a. When a fire breaks out I will 逃げる with all of money that I have.

b. May be I have nothing when I 逃げる from 火事 or 地震.

(24)' a. All of them ran away, leaving their wounded friend behind. (彼らは皆傷ついた友を置き去りにして逃げ去った) (『英和』)

b. The thief got away with the jewels. (『英和活用』)

「逃げる」は危険な状況から逃げるという意味で使われている。これは、(24)'で示すように、run away や get away で表現することができると考えられる。

持ち出す

(25) a. I 持ち出す nothing, if the fire and earthquake happen if I a time to 持ち出す something.

b. When disaster happen, I 持ち出す mobile phone.

(25)' A maid came to take away the tray. (『コウビルド』)

「持ち出す」は、災害などが起きた時、ある物を持ち出すという意味で使われている。これは、(25)'で示すように、take away～で表現することができると考えられる。

催す

(26) a. My class 催す a photograph 展示会.

b. In the show, we 催す a dance chorus, 劇 and cont.

(26)' put on a show (ショーを興行する) (『ジーニアス』)

「催す」は、文化祭などで、出し物を行ったという意味で使われている。これは、(26)'で示すように、put on～で表現することができると考えられる。

預金する

(27) a. If I were her, I don't use money and 預金する to my future.

b. When I get OTOSHIDAMA, I 預金する half of them in the bank and 充てる the rest for my pocket money.

(27)' He put that money into the bank. (彼はその金を銀行に預けた) (『和英』)

「預金する」は、お金を銀行などに預けるという意味で使われている。これは、(27)'で示すように、put A into Bで表現することができると考えられる。

連絡をとる

(28) a. I think handy phone is only item that 連絡がとれる people then.

b. So if mobile phone lose, I can't 連絡を取り合う my friends.

(28)' a. make contact with the police (警察に連絡する) (『和英』)

b. I still keep in touch with friends from school. (学校時代からの友だちとまだ連絡を取りあっている) (『英和活用』)

「連絡をとる」は、友人などに連絡をするという意味で使われている。これは、(28)'で示すように、make contact with～や keep in touch with～で表現することができる。

以上、学習者が表現した日本語¹⁶の例文を列挙した。また、それぞれに対応すると考えられる連語を29種類提示した。その結果、29種類の連語は、予備研究で使用した教科書3社のいずれかで8種類扱われていることがわかった。つまり教科書がこれら29種類の連語をカバーしている割合は、約28%であった。表5に各連語と教科書の扱いをまとめた。

表5：学習者の使用した日本語の表現に対応する連語とそれらの教科書での扱いの一覧

	連語	対応する日本語	教科書での扱い
1	bring back～	つまっている	×
2	come out	出てくる	NC
3	concentrate on	集中する	×
4	decide on～	決める	×
5	decide to V	決める	NH
6	finish～ing	完成させる	×
7	focus on	集中する	×
8	get away	逃げる	×
9	get tired of～	飽きる	×
10	get together	集まる	NH
11	keep in touch with～	連絡する	×
12	look into～	調べる	NC, NH
13	look up～	調べる	NH
14	make contact with～	連絡する	×
15	meet with～	遭う	×
16	save up～	貯める, 貯金する	×
17	participate in～	参加する	×
18	pick on～	いじめる	×
19	play the part of～	演じる	×
20	prepare for～	準備する, 用意する	×
21	put～into～	預ける, 預金する	×
22	put on～	催す, 演じる, 上映する, 展示する	×
23	regret～ing	後悔する	×

¹⁶ 学習者が表現したもののうち「残っている」は分析から除いた。連語で表すことが難しいと考えられるからである。

	連語	対応する日本語	教科書での扱い
24	run after	追いかける	NH
25	run away	逃げる	NC, NH
26	take away	持ち出す	NH
27	take charge of～	担当する	×
28	take part in～	参加する, 出演する	×
29	take place	開催する	×

3.5 考察—本研究結果から考えられること

3.5.1 教科書が扱う連語の割合

研究結果から、学習者が伝えたいことを表現できる連語は教科書にはあまり扱われていないことがわかる。教科書が扱う連語は「基本的」なものであるとしているが、学習者が伝えたいことを表現できる連語の割合は3割程度である。また、SSが扱っている連語のうち、学習者の伝えたいことを表現できる連語は1つもないことが明らかになった。

ただし、研究結果は英作文のトピックに強く影響されている。なぜなら、英作文のトピックは6種類だが、教科書ではさらに幅広いトピックを扱っているからである。その結果、扱う連語の種類に幅がでて、学習者が伝えたいことを表現できる連語の種類を補うことができなかったという可能性が考えられる。したがって、SSが扱っている連語では学習者が伝えたい事を表現できる連語を1つも扱っていないことがわかったが、英作文と教科書が扱うトピックに大幅に違いがあった可能性が考えられる。また、対応する連語は、筆者が6種類の英語辞書¹⁷を使い総合的に判断したものである。したがって、より多くの種類、または違う連語が対応する可能性もあることも考えられ、教科書が扱う連語の割合が変わることも考えられる。この点は、本研究の弱点といえるだろう。

¹⁷ 使用した英語辞書については参考文献を参照

3.5.2 中学校の教科書で扱われていない連語

次に、予備研究で調査した3社の教科書で扱われていない連語について考察していく。bring back～（つまっている）は(21)の例からもわかるように、思い出を呼び起こすという意味で使われている。これは、remember や recall などの動詞1語で表現することができると考えられる。She suddenly remembered that she had some homework to do.（彼女は宿題があったことを突然思い出した）、The story recalls my childhood.（その話を聞くと子供の頃を思い出す）（いずれの例もジーニアス）しかし、中学生・高校生は時間的制限があるため、教えることができる語彙の量は限られている。したがって、bring back～のように、基本語となる動詞と前置詞や副詞の組み合わせで多様な表現ができる連語を扱うべきであると考えられる。そうすることによって、限られた時間で多様な表現ができるようになる効率的な連語指導が可能になると考えられるからである。またそれらの連語は、前置詞や副詞の意味を同時¹⁸に指導することもできる。

たとえば次のような連語も単語1語で表現できるものだが、連語を指導する方がよいと考える。以下にそのような連語とそれに対応する動詞一語を一覧にして表6に示す。

表6: 単語1語で表現が可能な連語の一覧

	連語	対応する動詞
1	bring back	remember, recall
2	get away	escape
3	keep in touch with	contact
4	make contact with	contact
5	meet with	have
6	participate in	join
7	pick on	bully
8	play the part of	play
9	put on(演じる) / (上映する)	play / show

¹⁸この点については後述する。

	連語	対応する動詞
10	save up	save
11	take part in	join
12	take place	hold

以上に挙げた連語は、次のような点を考慮しておきたい。それは、ほかの連語を指導する時にもいえることだが、副詞や前置詞が持つ中心的意味も同時に指導できることである。たとえば、save up の up は大西・マクベイ(2011)によると、上昇という中心的意味からコップに水を入れ続け満杯になっているところが想像でき、完全という意味で up が使われることもあるとしている。また Close(1992)によると、貯金するという表現は、save だけでも表現可能だが、save up とすることにより、完全や完了といった意味が含まれるとしている。このように、副詞や前置詞の意味を同時に指導することができるのが連語指導の利点である。

しかし次の3種類の連語は動詞1語で表現できるとは考えられない連語である。順に示し説明していく。

get tired of という連語は飽きるという意味で使われるが、これに対応する1語の動詞はないだろう。また、get のみではまったく表現できない連語である。put ~into... という連語は預けるや預金するという意味で使われる。これに対応する唯一の1語の動詞は deposit という単語だが、これは中学校の教科書で扱われていない。また、put のみではまったく表現できない連語である。take charge of という連語は担当するという意味で使われるが、これに対応する1語の動詞はないだろう。また、take のみではまったく表現できない¹⁹連語である。

以上に挙げた3つの連語は、教科書では扱っていないが、学習者が伝えたいことを表現することができ、単語1語では表現できない連語である。

¹⁹ ただし、be charged with ~ では表現可能である。ジーニアスより、“I was charged with the task of explaining his failure.” (私は彼の失敗の理由を説明するという仕事を託された。)

4章 提案—コミュニケーション能力の育成に有効な連語と指導の留意点

本研究での結果と考察をふまえ、次の表7に示す連語を指導することが学習者のコミュニケーション能力の育成につながると考える。

表7: コミュニケーション能力の育成に有効な連語の一覧

	連語		連語
1	bring back～	11	pick on
2	concentrate on	12	play the part of
3	decide on	13	prepare for
4	focus on	14	put on
5	get away	15	put～into…
6	get tired of	16	save up
7	keep in touch with	17	take charge of
8	make contact with	18	take part in
9	meet with	19	take place
10	participate in		

これらの連語は教科書で扱っておらず、学習者が伝えたいことを表現することができる。これらの連語は教科書で扱うべきであると考えられる。

これらの連語を学習者に指導する際は次の3点に留意したい。(i) 動詞1語などで言い換えることができること、(ii) 副詞や前置詞が持つ中心的意味も教えることができること、(iii) 場面や働きに応じて適切に使用できるよう、応用性の高い形式で指導すること、である。

(i)は、多くの連語に関していえることである。この点を指導者は留意し、指導にあたりたい。具体的には、たとえば口頭で連語の導入を行う時は指導者側が連語を1語で言い換えることによって理解されることが期待できる。

(ii)も、多くの連語に関していえることである。副詞や前置詞の指導は、それら自体を単独で明示的に指導しても、どのようにそれらが使用される

かを示さない限り、定着が期待できないと考えられる。Otagaki & Otakagi(2004)は単語を単独で学習者に示すより連語で示すほうが、学習者が意味を記憶するのに有効であったと述べている。指導者側はこの点に留意し、副詞や前置詞の指導方法の一つとして、連語と同時に指導することが有効であると考えられる。

(iii)については、予備研究でも議論したように、教科書で扱う連語は学習指導要領が示す言語の使用場面やはたらきに応じて連語を提示するべきである。そのように提示するためには、連語は骨組みがわかるよう提示し、連語の後に続く目的語にどのような種類の単語がくるのか指導するのがよいと考える。たとえば、put~into…という連語の骨組みを提示し、put の後には入れるものがきて、into の後にはそれを入れる場所がくることわかる提示方法がよい。また、そのような提示をする際は、必ず入れるものとそれを入れる場所を述べる必要があることも同時に指導するべきである。つまり、動詞を正しく使用するには、動詞の求める項を満たす必要があると学習者に気づかせなくてはならない。なぜなら、日本語を母語とする学習者の場合、put into the bank のように目的語を省いてしまう傾向にあるからである。

5章 結語—本研究の成果と本研究における課題と展望

本論文は語彙指導の一つの課題であると考える連語指導に焦点をあて、コミュニケーション能力の育成に有効な連語を提示した。予備研究を行い、教科書で扱われる連語は各教科書によって様々であることが明らかになった。また、本研究は学習者コーパスを使用し、学習者の伝えたいことを表現できる連語を調査した。本論文の研究の成果を2つ挙げる。第一に新たに扱う必要があると考える連語を19種類、表7に示すことができた。これらの連語は、中学校で主に使用される教科書3種類が扱っていないが、学習者が伝えたいことを表現できる連語である。これらの連語を指導することで、学習者のコミュニケーション能力の育成につながると期待できる。

第二に、学習指導要領は指導すべき連語の具体的な指定をしていないが、本研究では指導すべき連語の具体的な指定をすることができた。しかしながら、本論文はそれらの連語を指導する具体的な指導方法・評価方法にまで至らなかった。これは今後の課題としたい。

本論文は、コンピュータを介して学習者コーパスを使用し、コンピュータで大量の英作文のデータを処理し、分析を行った。近年、コンピュータの進歩は著しく、本論文のようにコンピュータやコーパスを利用した研究というのが将来はますます増加していくと考えられる。この点において、本論文が一つのモデルとしての役割を果たすことができれば幸いである。

参考文献

- Benson, M. (1985). Collocations and idioms. In R. Ilson (ed.), *Dictionaries, lexicography, language learning* (pp. 61-68). Oxford: Pergamon Press.
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Annual Review of Applied Linguistics*, 1 (pp. 1-47)
- Carter, R., & McCarthy, M. (1988). *Vocabulary and language teaching*. London: Longman.
- Close, R.A. (1992). *A Teachers' Grammar: An Approach to the Central Problems of English*. London: Heinle
- Firth, J.R. (1957). *Paper in linguistics 1934-1951*. London: Oxford University Press.
- Murao, R. (2004). L1 Influence on Learners' Use of High-Frequency Verb + Noun Collocations. *ARELE: annual review of English language education in Japan*, 15 (pp. 1-10)
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning Vocabulary in Another Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Dell, F., & McCarthy, M. (2008). *English collocations in use: Advanced*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Otagaki, M., & Otagaki, S. (2004). Are Words in Collocations a Better way to Teach Vocabulary?. *Journal of Practical education, Naruto University of Education* 14 (pp. 91-96)
- Palmer, H.E. (1933). *Second Interim Report on English Collocations*. Tokyo: Kaitakusha.
- Shin, D., & I.S.P. Nation. (2008). Beyond single words: the most frequent collocations in spoken English. *ELT Journal* 62 (4), (pp. 339-348).
- 石橋嘉一 (2006) ヨーロッパ共通参照枠 (CEF) における「コミュニケーション言語能力」 『異文化コミュニケーション研究』 18 (pp. 161-179), 神田外国語大学
- 太田洋・日臺滋之 (2006) 『英語が使える中学生 新しい語彙指導のカタチー学習者コーパスを活用してー』 明治図書
- 大西泰斗・ポール・マクベイ (2011) 『すべての日本人に贈るー「話すための英文法」 一億人の英文法』 東進ブックス
- 岡部幸枝・松本茂 編著 (2010) 『高等学校新学習指導要領の展開 外国語科英語編』 明治図書
- 高橋一幸 (2011) 『成長する英語教師ープロの教師の「初伝」から「奥伝」まで』 大修館書店
- 投野由紀夫編著 (2007) 『日本人中高生一万人の英語コーパス JEFLL Corpus』 小学館
- 文部科学省 (1958) 『中学校学習指導要領』
- 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領』
- <文部科学省検定済み中学校英語教科書>
- New Crown English Course 1* (2006) 三省堂
- New Crown English Course 2* (2006) 三省堂
- New Crown English Course 3* (2006) 三省堂
- New Horizon English Course 1* (2006) 東京書籍

New Horizon English Course 2 (2006) 東京書籍

New Horizon English Course 3 (2006) 東京書籍

Sunshine English Course 1 (2006) 開隆堂

Sunshine English Course 2 (2006) 開隆堂

Sunshine English Course 3 (2006) 開隆堂

< 辞書 >

Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary: New Digital Edition
(2004) Harper Collins Publishers

The BBI Combinatory Dictionary of English (2009) John Benjamins Publishing
Company

『広辞苑』 (1998) 岩波書店

『ジーニアス英和大辞典』 (2001) 大修館書店

『新英和大辞典』 (2002) 研究社

『新和英大辞典』 (2003) 研究社

『新編英和活用大辞典』 (1995) 研究社